

会 議 録

会議の名称	令和4年度第1回那珂川市文化芸術推進審議会		
開催日時	令和4年8月25日(木) 13:30~15:30	開催場所	那珂川市役所 別館2階 会議室
出席者	<p>1. 委員 長津委員、田北委員、須川委員、簗原委員、柴田委員、森委員、鳥部委員、関岡委員</p> <p>2. 執行機関(事務局) 木下教育長、吉岡文化振興課長、藏菌文化振興課文化振興担当係長、福田文化振興課文化振興担当主任主事</p> <p>3. その他 株式会社地域計画建築研究所(コンサルタント)2名</p>		
配布資料	<p>資料1 審議会委員名簿</p> <p>資料2 那珂川市文化芸術推進審議会設置条例</p> <p>資料3 策定スケジュール</p> <p>資料4-1 市民意識調査の企画案</p> <p>資料4-2 市民意識調査案</p> <p>資料5 関係団体ヒアリングの企画案</p> <p>資料6 ワークショップの企画案</p>		
公開区分	<p>開示 ・ 一部開示 ・ 非開示</p> <p style="text-align: center;">(理由:情報公開条例第9条第1項第2号に該当)</p>		
<p>議題及び審議の内容</p> <p>1. 委嘱状交付</p> <p>2. 教育長あいさつ</p> <p>3. 委員・事務局自己紹介(資料1)</p> <p>4. 審議会及び計画策定の趣旨説明</p> <p>5. 会長・副会長の選出 会長に須川渡委員、副会長に田北雅裕委員が就任。</p> <p>6. 議題</p> <p>(1) 文化芸術を取り巻く国・県の動向(株式会社地域計画建築研究所より説明)</p> <p>(2) 市民意識調査について(株式会社地域計画建築研究所より説明) 別紙説明資料4-1、4-2のとおり</p>			

【質疑応答】

[委 員]：この文化芸術推進計画は、全ての人、住民を対象としている。アンケートの対象者が18歳以上というのは、何か理由があるのか。子どもの実態把握は、とても大切なことではないか。

[事務局]：市民意識調査について、現在の企画案は18歳以上を対象としているので、例えば、小学生や中学生、高校生は対象としていない。指摘があったように、今回の計画は子どもの活動も対象となってくる。この部分の意見についても、きちんと拾った上で計画策定を進めたい。その中で、事務局として考えていることは、1つは子どもを対象としたワークショップの開催、もう1つは、関係団体ヒアリングである。例えば、子どもが参加しているようなサークルの関係者や、学校の文化部の部活動、小学校を対象とするなど、これらを通じて子どもの実態を把握していきたいと考えている。

[委 員]：問1の「文化と聞いて何を思い浮かべるか」という質問だが、かなり広い質問だと思う。この質問の意図を掴みかねるので、どのような理由でこの質問を設けたのか、説明をお願いしたい。

[事務局]：この設問の意図としては、これまで無かった文化芸術に関する計画を策定するということで、文化に対する考え方は人それぞれであり、思い浮かべるイメージもバラバラというところがある。その中で、那珂川市の文化と聞いた時に、どのような認識、イメージを持っていらっしゃるのかを聞くことで、今回の計画を策定する上での議論の1つの要素になるのではないか、というところで入れさせて頂いた。

[委 員]：今のご説明からしても、「文化と聞いて思い浮かべるジャンルは何か」という質問と、「那珂川市の文化と聞いて何を思い浮かべるか」という質問が混在しているような気がする。もう少し何を聞きたいのかを絞った方が、より意図に近い質問になる。

[委 員]：小学校の現場には、市教育委員会からアンケートが送られてくる。子どもも、タブレットを使ってグーグルフォーム等で答えている。全学年ではなくとも、例えば、6年生だけ、中学生2年生だけというように対象を絞って調査をしてもらおうと、子どものニーズも分かってくると思う。学校で芸術に触れる機会がある。演劇の劇団や、アーティストを招いているが、全て先生が決めてしまう。子どもが何を聞きたかったのかなどが分からないまま進んでいるので、それを把握する機会になると思う。また、市のさまざまな取り組みも知らなかったということもある。関心を向けるためにも、子どもに対してタブレット等で聞いてはどうか。

[事務局]：教育部門と学校とに相談をし、全員を対象とするのは難しいと思うが、やれるやり方、学年やクラスを絞るという形で、子どもに直接アプローチして意見を聞くような意識調査ができないか、再度検討させて頂く。

[委 員]：どう聞くかというよりも、今、委員が言ったことは文化に関係するところ、社会的包摂につながるどころかと思う。子どもの意見表明権、子ど

もの権利として、子どもが自分で意見を表明する権利はある。例えば、来年度で言うと、児童福祉法が改正されて、意見表明権をしっかりと児童福祉の面からも位置づけないといけないという「子どもアドボカシー」、それから、特に社会的養護、家族と暮らせない子どもについては、「子どもアドボケイト」という形でしっかりと声を聞くという動きがある。このような計画づくりにおいて、「子どもに」という時に、実は子どもの文化を大人がコントロールしている面がある。これからの那珂川市の文化芸術を考えた場合に、子ども自身が意見を表明したり、主体的になれたり、特に学校文化になると、学校が子どもの声をコントロールしたりするところがあるので、そこも含めて、そういう中で育った子どもが文化を作っていくし、そういう学校も文化を持っている。柔軟な子どもの立場に立つことで、那珂川市の文化が作られていくので、そのような姿勢であるということと、ある種そういうものが、どのように位置づけるかはあるが、計画でも大事なポイントではないか。もう1つは、ミリカローデンの利用者は市内在住者に限らない。那珂川市らしきと言った場合に、那珂川市在住ではない周辺の市町村の人が利用しているということが、那珂川市らしきにもつながってくると考えると、市民意識調査に関しては市民を対象にしても良いかもしれないが、周辺の市町村の方のニーズをどのように捉えていくのか。この点は、経済的な価値の部分にもリンクしてくるところである。

[委員]：調査票を見ると、回答してくれるのは文化芸術に興味がある人だけという気がする。触れる機会がない人でも答えやすい設問を入れられると、決まりきった文化芸術に対する回答以外のものが得られて、策定に反映できるのではないか。

[委員]：特に子どもに関して、文化ということが何のことか分からないと思う。問3に書いてあるような内容を示し、「文化と思うものに○をつけて見ましょう」というような質問があれば、目にすることがあれば、「これも文化なのだ」となってくる。特に、子どもに聞く時は「何だと思えますか」というよりも、少し文字を目に触れさせることの方が、答えやすいと思う。

[委員]：文化に関わりがない方へのアクセスの方法で、関係団体の声を聞く時に、文化関係等の想像がつく範囲内ではなく、違う人にも声を聞いた方が良いと思う。文化の経済面について言うと、例えばミリカローデンで開催する有料公演であれば、来場者の半数以上が福岡市内からである。

[委員]：市民意識調査とあわせて、那珂川市にいる近隣の人も那珂川の文化という話があったが、そういう人が集まる一番の場所としてはミリカローデンだと思う。ミリカローデンに来た人に、アンケートを取るのはいかがでしょうか。

[委員]：ミリカローデンが拠点となるのであれば、拠点を使っている人たちの実態を把握することは、計画の中で重要になってくる。この計画の枠組みの中で取り組んで頂けるならば、ミリカローデン自体も知りたいことだ

と思うので、良い機会だと思う。

[委員]：図書館も併設しているので、図書館の利用で、エントランス等に来ることも考えられる。文化ホール単体で来るというよりも、複合的に来る人が多いと思う。

[委員]：ミリカローデンについてもそうだと思うが、博多南駅前ビル「ナカイチ」も、那珂川市外から来る那珂川市の文化を支える人達ということで、もう少し深く知るキッカケがあると良い。

[事務局]：市民意識調査の案は、本日確定する必要はない。調査時期についても、今のところ10月から11月というところであり、内容を編集する期間はある。今日でなくても、後日でもご意見を頂ければ反映させたい。

[委員長]：早速の皆さんの積極的なご意見、ご提案、有り難うございます。話が、次の(3)と(4)の項目にまたがってしまったので、先に事務局よりご説明をお願いしたい。

(3) 関係団体ヒアリングについて（株式会社地域計画建築研究所より説明）

別紙説明資料5のとおり

(4) ワークショップについて（株式会社地域計画建築研究所より説明）

別紙説明資料6のとおり

[委員]：ワークショップの企画案のところで、子育て中の両親とあり、主な特徴として「20～40歳代女性が多く…」とある。この両親というのはどういうことか。また、関係団体ヒアリングに関しては、調査場所としてミリカローデン、中央公民館、ナカイチなどが挙げられているが、これらの施設を運営している方へのヒアリングは、別にされるのか。あるいは、この関係団体ヒアリングに含まれるのか。

[事務局]：関係団体ヒアリングについては運営団体へのヒアリングを含んでいる。ワークショップについては、言葉の表現を改めさせていただきたい。参加対象として挙げているのは、他自治体で市民意識調査等をさせて頂く中で、文化芸術に触れていない層としてよく出てくる人たちであり、働いている人、子育て中の人、高齢者の人、このような人々の話を聞けるようなワークショップができないかと思っている。プラスαで、子どもの声を、今の企画案では市民意識調査では対象としていなかったために、ワークショップで対象としたところである。

[委員]：普段あまり触れないような人は、ワークショップには来ない。実際に、文化に触れない人として、例えば、引きこもりの子は、ネットでゲームをしており、これもある種の文化であるという気がしている。

[委員]：意識調査があつて、ワークショップがあつて、個別ヒアリングがあつて、そこで色々な人へのタッチポイントを作るというのはあるが、普段、来ないような人にワークショップを呼び掛けても来ない気がする。もう少し、目的を明確化した方が良い。

[委員]：他の自治体でこの手のワークショップをしたことがある。この時に良かったことは、その後、話し合った内容はさておき、「こういうワークショップは楽しいので、これからもこの文化施設で、このワークショップだけでもやってほしい」との声が出たことだった。それで、今年2回目を予定している。今の企画案は、ワークショップをやるためにやっている感じが見えており、残念である。また、従来届きにくい人に集まってもらって意見を聞くことは難しく、市民意識調査の中でそのニーズを拾っていく方が現実的である。もしくは、届きづらいからこそ、関係団体として、例えば子育て団体や、どこかの学級にパイロット市場的に聞いてみるなど、こちらから出かけていかないと届かないのではないか。そこが、逆になっている印象がある。

[委員]：例えば、高齢者であれば公民館に行って聞く方が、ワークショップに集まってもらうよりも、声が聞けるのではないか。また、障がいのある人は、関係団体にも含まれているかもしれないが、行きたくても行けないというニーズが恐らく高いと思う。その辺りの声も聞いて頂ければと思う。

[委員]：集まって頂くというよりも、集まりそうな場所にこちらが出かけるという姿勢が大切だと思う。小さな子どもがいるから集まれないのであれば、どういう場所に出かけているかを考えると、例えば、〇歳児健診などがある。そのような場所で、その場で意見聴取が無理ならばアンケート、あるいは簡単なことだけ質問する。多くは難しいと思うが、対象者がいるところに、こちらが出かける形をやってみてはどうか。

[委員]：ワークショップのイメージが湧いていない。全国で色々とされているとのことだったが、ワークショップの実情はどのようなものか。

[事務局]：主に文化芸術活動をされている方を対象としていることが多い。この場合は、実際にされている人に、「どんな施策をやってほしいか」というニーズを聞いたり、「もし、そういう施策があるならば実はこんなことをしたい」ということを話し合ったりすることが多い。実際に文化芸術活動をされている人の声を聞いたり、施策に盛り込んだりすることは大事だが、触れていない人に、どのように参加してもらうか。また、参加しなくても、触れていない人がいるところに文化芸術を届けることが大事だという実感がある。普段、触れていない人にお話が聞ければということで企画案を検討したが、まだ、中身が詰まっていないと認識した。

[委員]：この事業自体は、文化振興課が所管ということだが、関係団体ヒアリングに関する資料の中で、中央公民館でも文化協会に所属する団体と書いてある。同じ所に、社会教育課がある。行政の中でも、横とのつながりを入れてもらいたい。社会教育課にも、様々な団体があり、文化芸術に取り組んでいるところもある。障がい福祉課でもそうだと思う。そのような所との繋がりを作りながら、ヒアリングされてはどうか。今、言われたように、今まで目に留まっていなかった所が見えてくると思う。せっかくの機会なので、横のつながりで、様々な情報を入れてヒアリング

ができれば、ずいぶん広がっていくと思う。

[委員]：関係団体ヒアリングについて、意見聴取が必要な団体等とあるので、文化系の団体以外に是非、積極的に聞かれることが、国や県の趣旨を生かしていくことになると思う。障がいのある方の団体、ご高齢の方の団体、社会福祉協議会のような福祉を支える団体、他にも、この調査の意図にもよるが、観光系の団体、地域振興の団体など、幾つか関わる所があると思うので、そのような所への意見聴取が必要ではないか。

[事務局]：先ほどの委員からのご指摘について、行政の庁舎内部の文化芸術に対する意識や、今後、この計画をどのように他の分野、他の所属と繋げていくのかという点は、我々としても課題を感じているところである。今、ご指摘のあったヒアリングの段階から、他の部署を巻き込みながら色々な分野のヒアリングを行うということは、その通りだと思う。私達のイメージとしては、計画の策定経過については、全庁的に共有していくことを想定していたが、計画を作ること自体から他の部署をつなげていくことは大事な視点であると改めて思ったので、その可能性、今後のやり方については、もう一度検討したい。

[会長]：市民意識調査とヒアリング、ワークショップということで、できるだけ多くの多様な声を聞くという方向で進められたらと思う。また、今回の企画案に出てこなかった調査対象についても、リストにして整理していくという方向で進めて行ければと思う。これで6の議題の内容は全て終了ということにしたい。7の話題提供に移りたい。

7. 話題提供（長津 結一郎委員より話題提供）

8. 意見交換

[会長]：芸術文化とは何かということや、ここまで関わったことがない人にどういいう芸術文化を届けるかなど、今回出た議論の問いに応答して頂いた。では、今の長津委員の話題提供の感想も踏まえての意見交換としたい。

[委員]：話を聞いて、自分の中で凄く腑に落ちた。色々な所で、色々な人が「これ芸術、文化だよな」ということをしている。しかし、実際に私も審議会委員の話があった時に、文化芸術という文字を見て凄くハードルが上がった。みんな文化芸術活動をしているが、この文字を見るとハードルが高く感じてしまう。ハードルを少し下げていく。本質的な価値は確かに大事だが、「これもそうだな」と皆が思えるような市になっていけば、もっともっと文化芸術は広がると思った。

[委員]：社会的包摂にとっても関心を持っていて、ミリカローデンもその拠点になればと思っている。アートの視点から福祉問題、社会問題を解決していく、そういう所になれば良いと思っており、今日の話題を聞いて、その気持ちを強くしたところである。そのためには、それを推進していくための組織、費用、関わって頂ける人がとても大切である。ぜひ、那珂川市の皆さんにもご協力いただきながら出来たら良いと思った。

[委員]：今の太野城市の活動の中でも出てきたが、行政の方は枠がある。その枠を超えて活動されたので、あれだけ効果があつて、良い結果になつたと思う。今回の事業でも、担当部署はあるが、那珂川市として、とても大切な事業をされていると思う。先ほども、アンケート1つにしても色々な部署に関わることをして、協力してもらつたという話があつた。そういう意識で、枠を超えた活動が出来れば良い結果につながると思う。

[委員]：芸術文化と教育という視点で見えてきたところがある。今、図工の研究校は筑紫地区にはなく、芸術分野は肩身が狭い。しかし、子どもは図工が好きである。もっと芸術に触れさせたいと思っている中で、紹介頂いた中で教育と絡めたり、学童と絡めたりという話があつた。教育と絡んだ話を、もっと聞きたいと思った。本日、繋がりが出来たので、また色々と教えて頂きたい。

[委員]：那珂川市について何も知らないので、那珂川市の特徴や、人とアートがどうやって、今後つながっていくか、その施策をどうしていくかに凄く興味があり、面白く拝見した。

[委員]：聞かせてもらった内容がこの計画を作つた先にある、あるいは、那珂川に住む人達が、先ほど委員の意見にもあつたように「これもそうかなと思つた」という想いを持つような温度感を目指したい。「いいな」、「こういうもんだよね」など温かくなる感じが、計画を作つた先にあることを忘れないようにしたい。今、自分達が「これ芸術文化ではないか」、「文化ではないか」という言葉で想像できる所から計画づくりをした時に、計画づくりが目的の計画になる。「確かに計画を作り、しっかり考えたはずなのだけど、これは別に那珂川市ではなくてもよくない？」というような、いわゆる一般的な計画になる。その先にある生き生きとした市民の温度感がない。そうならないようにするためには、計画づくりも、文化に対する想いを大事にしながら作らないといけなかつたと感じた。

[委員]：感想をお聞きしながら、やはり費用は大事である。費用というのは、計画を策定し、その後、計画を実行する時に、予算が無いということにならないように、是非、行政の皆さんにはお願いしたい。他自治体の場合に部署横断が成功したのは、部署の人の選び方が上手かつた。福祉課の課長というような役職で選ぶのではなく、「あの課のあの人は凄く変な人だから、きっと誘つた方が良さよ」ということで連れてきているのが、凄く上手かつた秘訣だと思っている。計画策定の段階から関わつたので、かなり当事者意識を高められていた。今は、もちろん全員異動してしまつたが、そのマインドが継承されている。参考にできるポイントだと思う。委員がおつしやつた風景や温度感の共有は凄く大事だと思っている。ただ、あいにく私は「那珂川の」という所がまだまだイメージできていない。この審議会を通じて、「自分の所であればこんな風になつたら良いと思うのに」というような、価値観の共有が起これると、実のある事業になつてくると思う。

[会 長]：大変、面白い話題提供で勉強になった。どうしても、文化芸術政策となると固いイメージがあると思うが、やはりそこに人の顔が見えることが必要と思う。このように市民意識調査を行うということも、大事なのはそのプロセスだと思う。どういう施設があり、そこにどういう人がいて、どのような文化芸術を欲しているのか、それぞれ違うと思う。那珂川市でどのようなことが行われているかということ、私もこれからじっくり学んで知りたいと思う。何か質問等あれば、お願いしたい。

[委 員]：実際に部署横断的なことは、何か取っ掛かりとなることありそうか。現状は計画策定の段階で様々な部署の方を巻き込むことは、特に想定されていないと思うが、今後を見据えた場合に何かあるか。

[事務局]：何かしら横のつながりを作っていく必要性、大事であることは、事務局として感じているところである。例えば、各部署から職員を引っ張ってきてワークショップや、内部検討会議という形でなくてもさまざまな手法を視野に入れて検討を続けていきたい。

9. その他（文化振興課より今後の日程等について報告）

[会 長]：以上をもって第1回那珂川市文化芸術推進審議会を閉会する。